

善照寺
寺報

ぜんしょうじ

第20号

〒272-0131

市川市湊十八番二十号 善照寺
電話 四七(三五七)二二三三
FAX 四七(三九七)一三三二

明けましておめでとーいづれいます

善照寺住職 今岡 達雄

皆様、明けましておめでとーいづれいます。寺に近隣の皆様方は既にご存じのことと思いますが、昨年十一月二十七日に救急車で緊急入院しました。原因は心臓の不安定狭心症、心臓の筋肉細胞に血液を供給している冠動脈という血管が狭くなって、血流が少なくなつて胸痛に襲われたよう



です。平成十三年正月に胸痛に襲われて以来五年ぶりのことでした。善照寺の青年組織「慧日会」のバス旅行を十一月二十五日に予定しておりましたが、胸部の不調のため住職だけ急きょ旅行を取りやめ、翌週明けに医者に行こうと考えているその日未明に胸痛に襲われ、救急車を呼んだ次第です。

十一月二十八日、十二月五日両日に腕からカテーテルを挿入し、狭くなった血管の拡張手術を行いました。現在のところ胸痛はなくなり、通常の生活が出来るようになりました。二週間強の入院でしたが、この間は寺

の仕事が出来ずご迷惑をおかけしたこと、心よりお詫び申し上げます。特に入院中にお亡くなりになった方には、そのご家族・ご親族の皆様には、通夜・葬儀等につき大変ご心配をおかけしましたこと、誠に申し訳ありませんでした。

心臓には「寒さ」が良くない、暖かくなるまで慎重に暮らすようにと医者から指導されました。五年前の心臓発作以来、近隣の御檀家への新年の挨拶は「寺報」をもって代えるように致しました。その後、昨年までお伺いして新年の読経させていただいていた檀信徒の皆様につきましても、本年はお伺いすることが出来ません。誠に申し訳ありませんがご了承下さい。

今後とも健康に留意し、皆様にご迷惑をおかけすることがないよう努力する所存です。今後とも相変わらぬご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

合掌

年間行事予定

平成十九年の行事の予定は次の通りです。是非ともお参り下さい。

- 初念仏会 一月十七日(水)
- お彼岸春 三月十八〜廿四日
- お盆東京 七月十三〜十五日
- 地元 八月十三〜十五日
- 施餓鬼会 八月十七日(金)
- お彼岸秋 九月二十〜廿六日
- お十夜会 十一月十七日(土)

平成十九年年回表

- 一 周忌 平成十八年
- 三 回忌 平成十七年
- 七 回忌 平成十三年
- 十三 回忌 平成七年
- 十七 回忌 平成三年
- 二十三 回忌 昭和六十年
- 二十七 回忌 昭和五十六年
- 三十三 回忌 昭和五十二年
- 三十七 回忌 昭和四十八年
- 四十三 回忌 昭和四十四年
- 四十七 回忌 昭和四十一年
- 五十 回忌 昭和三十三年

狭心症 闘病記

入院までの経過

平成十三年一月四日年始参りの途中で胸痛におそれ入院しました。同年六月に血管拡張手術、同年十二月にカテーテル検査とこの歳は年三度も入院しました。これが狭心症との付き合い合いのはじまりでした。

その後は胸痛もなく順調だと思っていました。平成十八年の十月位からたびたび胸痛がするようになりまし。運動をしたり、階段を駆け上ったりした後に胸痛があり、二トログリセリンを舌下にすると治まるとい

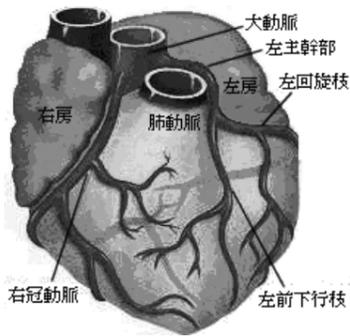


図1 心臓冠動脈の構造

うことが何度もありました。

そこで、冠動脈を拡張する薬の量を増やし、二ヶ月に一度の定期診療を毎月にするという体制でありました。その結果があつたのか十一月に入ると結構調子が良くなり、十夜法要も無事に済ませました。十一月二十日に定期検査がありました。持ち直したようなのでそのまま様子を見ることになりました。

十一月二十五、二十六日に善照寺役員・慧日会の一泊バス旅行が予定されておりました。出発日の朝胸痛があり私は旅行を諦め皆さんをお送りしました。月曜日に病院に行くことを予定していましたが二十七日未明に強い胸痛があり救急車で緊急入院しました。

不安定狭心症

心臓には、心筋に酸素を供給する二つの大きな血管があります。心臓のまわりを冠のように取り巻いていますので冠動脈と

呼ばれています。右側と左側に一本ずつ、左冠動脈は裏に回る左回旋枝と下方への左前下行枝に分かれています(図1)。

狭心症とは、動脈硬化によって血管内壁が盛り上がり通路が狭くなり、冠動脈の血の流れが悪くなることによつて、心筋への酸素供給が不足し胸痛が起こる病気です。狭心症には胸痛の起き方、強さ、回復時間などに大きな変化のない安定的狭心症と、これらの状況が変化する不安定狭心症があります。不安定狭心症は放置すると急性心筋梗塞になりやすいことがわかっています。私はこの不安定狭心症と診断されました。

第一回目冠動脈形成術

入院当日は点滴で抗血栓薬の投与が行われました。翌二十八日には動脈にカテーテルを挿入して冠動脈の詰まり具合を調べ検査が行われ、同時に経皮経管的冠動脈形成術(PTCA)

左前下行枝

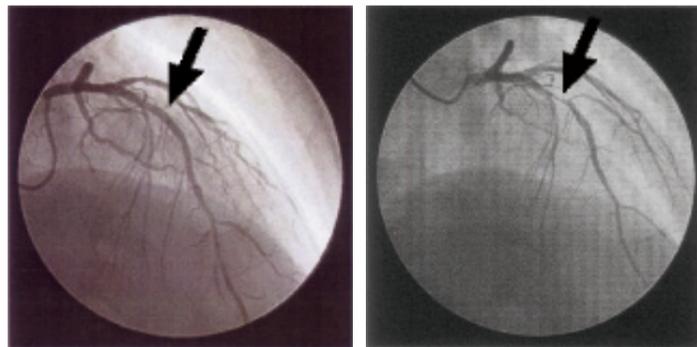


図3 12月5日手術後

図2 11月28日手術前

が行われました。麻酔は手首の動脈切開部だけの局部麻酔ですので、手術中の様子は逐一聞くことが出来ました。PTCAとは、まずカテーテルを右手首の動脈に挿入し心臓冠動脈の狭窄部位まで進めます。ここで造影剤を注入して狭窄部位を観察し治療方針を決めます。その画像が図2、図5です。図2は左前

下行枝です。矢印で示した部分が広範囲に狭窄しています。図5は右冠動脈で矢印の部分が一部が閉塞しています。

図2左前下行枝は動脈の元に近く、完全閉塞すると広範囲に心筋梗塞を起こす可能性があるので優先的に治療することになりました。治療によって下流の血管が詰まらないようにガイドワイヤーを通した後、ステント

(金属メッシュの筒)を挿入し、ステント内にバルーン(風船のようなもの)を挿入してこれを膨らませてステントごと血管を拡張しました(図4)。

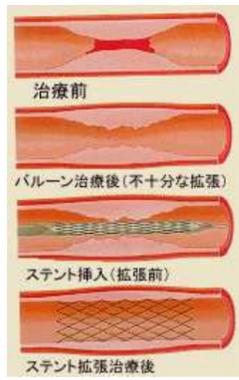


図4 PTC A手術

カテーテルを抜き止血すればこれで終わり目出度し目出度しでしたが、実はカテーテルを抜いた後で、挿入し拡張したステ

ントの内側に血栓が溜まりはじめ、ステント内が血栓で詰まっ

てしまいました。胸痛が激しくなってきました。急ぎよ左手首からカテーテルを挿入し、ガイドワイヤーを挿入して血流を確保、血栓溶解剤(ウロキナーゼ)を投与し、更に血栓を吸引除去する処理を行いました。

血栓を全て吸引除去し、血流が確保されたことを確認してカテーテルを抜いたところで再び胸痛、再度血栓が出来はじめたようです。今度は特殊な中空バルーンで血栓を動脈壁に押し込

込む処置をとることになりました。十五分の押さえ込みを三回行ってどうやら血栓も安定したよう

第二回目冠動脈形成術

十一月二十八日の第一回目の手術の後、抗血栓薬(血液を固まらせ

右冠動脈

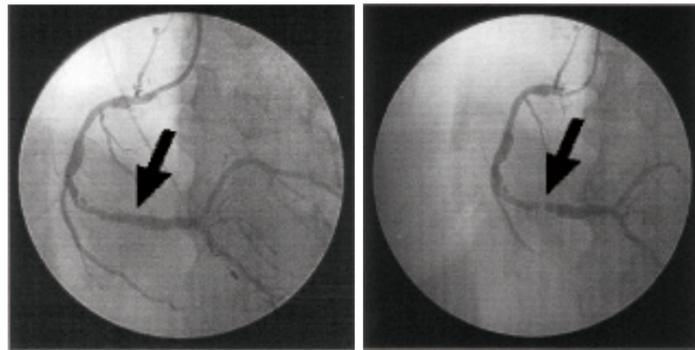


図6 12月5日手術後

図5 11月28日手術前

へパリン)を投与、様子を見ていましたが安定しているようなので、一週間後、やり残した右冠動脈の処置を行うことになりました。十二月五日、右手肘部の動脈からカテーテルを挿入し第一回手術の後を造影してみたのが図3です。血管の拡張に成功したことが明らかです。これを確認した後、右冠動脈の狭窄

部(図5)の手術に入りました。「短いステントをそつと置いてくる」という治療方針で、その通り行われたました。結果が図6です。第二回目の手術は順調で一時間もかからずに終わることが出来ました。

退院と療養

その後冠動脈拡張剤ニトログリや抗血栓薬へパリンを点滴投与とされていましたが、これらを徐々に経口錠剤に替え、問題が起きないことを確認して十二月十四日に退院となりました。

冠動脈形成手術を受けた人の約二〜三十%は術後六カ月以内に、多くは数週間以内に再び冠動脈の狭窄を起こすことがあるそうです。ここ六ヶ月がヤマ場だそう

で無理はしないよう、また急に寒い場所に出ると血管が収縮するので気をつけること等指導されています。そこで今年

住職法話

阿弥陀仏に

救われるのは

平生か臨終か

今回はお念仏の現世におけるご利益についてお話ししましょう。阿弥陀仏の本願を信じ、極楽往生を願ってお念仏する人は、息を引き取るとき阿弥陀仏がお迎えに来られ、極楽浄土にお導き下さるこれがお念仏の信仰です。つまり来世での極楽生活を得ることが出来るのですが、現世ではどうなのかと疑問に思った方がいらっしゃって、法然上人にお尋ねになりました。これは『念仏往生要義抄』に書かれている逸話です。

【原文】
問うていわく
「撰取の益をこつぶる事は、平生か臨終か、いかん」

答えていわく

「平生の時なり。そのゆえは、往生の心ま事にて、わが身をうたごう事なくて、来迎をまつ人は、これ三心具足の念仏申す人なり。この三心具足しぬればかならず極楽にうまるといふ事は観經の説なり。かかる心ざしある人を、阿弥陀仏は八万四千の光明をはなちててらし給うなり。平生の時にてらしはじめ、最後まですて給わぬなり。かかるがゆえに不捨の誓約と申し候なり。」

【現代語訳】

質問があるのですが、
「お念仏によって阿弥陀さまの光明に救われるのは生きて生活しているときでしょうか、それとも臨終の時でしょうか？」

それではお答えしましょう
「平生の時からです。それは往生を願う心に偽りがなく、こんな我が身ですら往生が叶うといふことを疑わずに阿弥陀さまの

来迎を待ち望んでいる人

とは、三つの心すなわち素直な心、深く信じる心、弥陀の救いを願う心をもつ念仏をする人です。観無量寿經には三つの心をもつ念仏をする人は必ず極楽に往生できると書かれています。このようなこころざしを持つた人に対して阿弥陀さまは限りない光明で照らしになります。その光は日常から照らし始めて、最後臨終にいたる時まで照らし続け、決してお見捨てにはなりません」

【解説】

私達は真つ暗闇の中では生活することが出来ません。でも太陽や電灯のおかげで昼も夜も、雨の日も風の日にも明るい生活を営むことが出来ます。その明るい生活の中にあっても、心の中は解決の糸口も見えない



あけまして
おめでとございます

ほど真つ暗闇の中で暮らしているのではないのでしょうか。その真つ暗闇の中で訳もわからず苦しんでいる私達に明るい希望の光を差し延べてくれるのです。それが阿弥陀仏の救いの力です。つまりお念仏をはじめると、はじめたときから亡くなるまでずっと明るく暖かな光につまれます。その感覚が生きるための大きなパワーとなるのです。これが救いの力です。